

## 【JTM 企画】 地域観光プロデューサーの先達に聞く

□懇談会メンバー	浅井 信 (NPO 法人千葉自然学校 理事)
	村上 政司 (財団法人 箱根町観光協会 専務理事)
	渡邊 法子 (稲取温泉観光協会 事務局長)
□司会進行	中根 裕 (株式会社ツーリズム・マーケティング研究所 取締役主席研究員)

**中根** 本日お集まりいただいた皆様方とは以前から懇意にさせていただいていましたが、あらためてお忙しい中ありがとうございます。近年、地域の観光において外部からプロデューサー的な役割を担う人材が求められている中で、国土交通省でも観光プロデューサーの派遣支援制度が創出され、今後は地域に入って活動したいと願う方々がさらに出てくると思います。本日ご参集いただいた皆様方は、地域観光プロデューサーとしていわば先達であり、その意味で多くのご苦勞をされたことと思います。外から地域に入られて、外から来た人材だから見えてきたもの、あるいはご苦勞談等をお聴きし、これから取り組もうとする方々や地域に対して、何らかの参考となればと思います今回の座談会を企画いたしました。

地域で活躍する観光プロデューサーとしては、技術や知識も大切であると思いますが、本日は皆様方が地域に入られようとしたきっかけや思い、実際に地域に入っただけの実感や苦勞談、やりがい等、書籍や文献等だけでは得られないような話についてもお聴きできればと思います。

### 【1】自己紹介と近況報告・地域に入られたきっかけ・動機づけは？

**中根** 皆様方は地域から請われて招聘され、地域観光プロデューサーとしてご活躍されていらっしゃいますが、最初のパートでは、自己紹介を兼ねて、地域に入られたきっかけや近況などをご紹介いただければと思います。

**浅井** 私は、お二人と違って現在は現役ではございません。平成13年から3年間、館山市の観光プロデューサーの仕事をし、以降は、私の個人的な思いからボランティアとしてこの分野に関わっており、足掛け6年間、この分野に携わっています。いま感じていることは、前半の3年間と後半の3年間とを比べてみると、後半の3年間は違った面白みを見出し、別のやりがいを感じています。

観光プロデューサーの仕事を離れて何故ボランティアとして活動しているかについてお話ししたいと思います。地域の方々に呼びかけや働きかけをする際には自分の思いを伝える必要があり、地域の方々に対しての約束事を語ってきたのではないかと思ったからです。観光プロデューサーの3年間は短い期間であり、やり遂げられなかったことの方が圧倒的に多い。思いのうちの1～2割位しか実現されていなかった。そうすると、当初の思い、特に約束したことがどうなるかを見届けたいということで、未だにこの分野に関わっています。また、千葉県では今年DCキャンペーンを実施しましたので、このキャンペーンでの成果をみるまでは積極的に関わろうと思っていました。



浅井 信 氏

先日館山の新しい観光協会長とお会いする機会があり、「浅井さんが取組んでくれたことが地域の新しい観光の始まりだった」と言っていました。着任していた時は、大きな成果は出ていなかったけれども、6年間経ってようやく理解されてきたのかな、と感じた次第です。

**村上** 下田市の観光協会を経て、現在は箱根町の観光協会です。現在の箱根町観光協会の専務理事の仕事は、どちらかと言うと組織運営・施設運営なんですね。昨年4月に箱根町の観光公社と観光協会とが統合されたことがきっかけで呼ばれました。観光プロデューサーとしての活動では、現職の箱根町観光協会ではなく、むしろ下田市での活動が今回の対談の趣旨に沿うのではないかと考えていますので、下田での活動を中心にお話させていただきます。

2000年、新世紀創造祭の時に下田市にJTBから出向で行きました。当時は、今と比べるとまだ地域は活性化していました。下田市からJTBに申し入れがあり、派遣されたような形で、当時としては珍しいこともあり、新聞などに数多く取り上げられました。行政からの要請でしたが、肩書きとしては観光協会の仕事をしていました。

しかし実際に着任すると仕事がまったくない。そこで自らの担当する仕事を見つけ出そうと、旅行会社時代に手がけていた「教育旅行」を地域の中で展開することを始めました。お陰さまで、現在では下田の教育旅行が一つの形として定着してきています。旅行業から来た者が地域活性化にどのように貢献できるかを考えた際に、地域に集客すること、その手段として教育旅行を中心とした事業を仕掛けたのです。当初3年の予定でしたが、結果的には6年間、下田市で活動することになりました。観光プロデューサーとしては、地域にどっぷりとつかっていたということ。地域の様々な方々と毎日のように飲んでいたことを思い出します。

浅井さんも同じ境遇だったと思いますが、当時は観光プロデューサーということがまだ認知されていない時期で、早めに地域に出た人間であろうと思っています。

**中根** 渡邊さんは今年の4月に着任されたばかりですので、それ以前の活動の話や、今回応募された思い等についてのお話をいただければと思います。



渡邊 法子 氏

**渡邊** 私はNPO 全国まちづくりサポートセンターというところで活動していました。この団体は、平成15年に設立された組織で市民側の立場で行政との協働を進めてきました。実際にまちづくりに取組んでいると、どうしても行政主導で進められることが多く、水平展開や横の組織との連携すら図れないといった限界を感じていました。地域住民の立場から見ると地域内の組織の壁は関係なく、縦割主義や予算主義で不合理な状況が展開されていると感じていました。行政内部に優秀な人材や良好なアイデアがあっても、日の目を見ないものとなってしまっているのではないかと疑問を感じていました。

地域性の強い地域に行くと、しがらみや地域住民の顔が見えて自由な意見が言いあえない。地域の中の方々だけでは調整しきれない問題が多々あるこ



村上 政司 氏

とを感じました。今回、稲取温泉観光協会が稲取温泉の中の仲介役・調整役を外から求められていたことを受けて就任しました。地域の方々の意見の聞き役・調整役である一方で、やはり地域活性化の結果を出すことにも期待されており、一人で何役もこなさないといけない状況にあります。

今回の観光プロデューサーに応募したきっかけは、全国まちづくりサポートセンターでまちづくりの仕事をしていた、仕事としてやりがいがあり素晴らしい仕事だと感じていたこと、地域に住んで一緒に活性化に取り組めること、稲取はこじんまりとした地域であること等があったように思っています。

**中根** 観光やまちづくりに関わっていると、東京から出かけて行ってコンサルティングする立場の限界は、私も常を感じています。その限界を超えて、地域の中に身を置くことで地域活性化に貢献しようという思いがあったのでしょうか。当事者として地域づくりに参画する、といった感じでしょうか。

**渡邊** 言葉でいくら語ったとしても、地域外から言っていると、同じ目線でもって限界がある。どうせ貴方は他所者で帰る人、と思われている。感情面も含めて一緒に苦労するのは、やはり地域に住まうことであると思います。

**中根** 村上さんは、会社から出向という命を受けて地域に入られた。一方浅井さんは自らの職を辞して地域に入られましたよね。館山に行こうとされた動機づけは何だったのでしょうか。

**浅井** 個人的に館山のゴルフクラブ会員であったので、自宅の船橋と館山の間は以前からありました。外から眺めていた館山の風景は素晴らしかった。館山湾はハワイのワイキキ海岸にも似ていると感じており、こんな魅力的なところにはもっと人が来ないはずがないという自信めいたものがあった。

**中根** プライベートで外から地域をご覧になっていて、ご自分の活性化プランをお持ちになり、それを自らが実践したいという気持ちがあったということなのでしょうか。

**浅井** そうですね。もう一つは年齢的なものもありましたね。当時 57 歳でした。あと 3 年で定年を迎えるという時期にさしかかっていましたので、地域に踏み込んじゃえ、という気持ちになりました。これが 50 歳の前半だったら考えていたかもしれませんね。

**中根** 時代的なものもあったでしょうね。旅行業界として。

**浅井** 丁度、旅行業界が厳しい時代であったことは確かですね。

**中根** 村上さんは、下田に行かれるまでは商品をつくる側にいらして、今度は受け容れる側という形になったわけですが、率直なところの感想はいかがでしたか。

**村上** ご存知のように下田までは関東圏域なのです。ということで以前から地域の旅行業界の方々とのお付き合いはありました。後日談ですが、旅館さんからの強い理解を得られていたようです。

着任してみると、観光協会の名刺をもってはいますが、席は役所の観光課の中にある。着任当初は、地域の方々と会うことに時間をとりました。その時に民宿の方と話をしていた「昔(昭和 40 年代)の民宿はすごくよかった」「民宿はどうすれば生き残れるか」という声をお聞きし、ふと「教育旅行」のアイデアが沸いたんです。

派遣元の会社としては、自ら努力して仕事・役割を見出せという立場であったことが、結果としてよかったのではないかと思っています。

**中根** 派遣元の会社も、あるいは地域の下田市の側も観光プロデュースという役割の具体的なイメージは当初持っていなかったんでしょうね。下田市での 6 年間の活動は、自らがプロデューサーとしての役割の必要性を感じられて活動されたということですね。

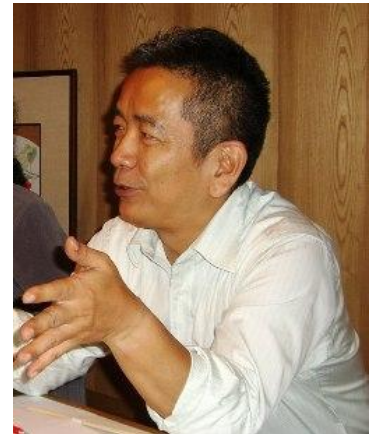
**村上** よかったのは気軽に活動できたこと。組織としては「何もやらなくてよい」というスタンスでしたか

ら。現職は組織の中での活動ですが、当時としてはフリーで動けたのが良かったと思いますね。

地域の方々が、教育旅行の数字が増えてきたと報告されたことが、活動を評価されたことにつながりました。土日は一緒に色々とお手伝いしたことも良かったと思っています。

## 【2】地域に入っの印象、予想と現実とのギャップ、期待・やりがい・発見・収穫は？

**中根** 実際に地域に入ってみての印象はどうだったのでしょうか。予想していたものとのギャップ等がありましたでしょうか。あるいは思ってもいなかったような期待・やりがい・発見・収穫のようなものはありましたでしょうか。



司会 中根 裕

**浅井** 先程の渡邊さんのお話の中にありました、地域における役割では同じことを感じています。私はそれを「よそ者・わか者・バカ者」と表現しています。やはりよそ者でないとできないことがあるでしょう。地域に入って初めてわかったことは「横並び意識」。ちょっとでも出ると叩かれる。地域の中には人材やアイデアがないのではなくて、地域の中で皆なでつぶしあいをしている。よそからきた者は、地域の中の人材やアイデアをひっぱり出すことが役目である、と着任早々に感じました。

**中根** 地域の人々は、地域の中で先祖代々から暮らしており、これからも住み続けるしがらみもあるので、そこまでの覚悟での丁々発止のやり取りは難しいのでしょうか。

**渡邊** 本当にできないと思います。生活が掛かっていますからね。

**村上** 自分達ではできないので、公募で観光プロデューサーにそれを求めている。外から言わせているのですよ。地域の中でも変えたいと思っている人が観光プロデューサーについてきてくれると巧くいく。下田でも2人の方がついていただき、3人で地域の観光を変えようとして取組んだのです。

**中根** コンサルタントとしての最大の仕事は、地域に言いづらいことであっても、ダメなことはダメということを明確に告げることであると思っています。私は地域外に足場があるので、まだ客観性を担保できますが、皆様方は地域にお住まいになり地域の方々と同じ目線で活動されながら、外の目線も持ち続けるというのは大変ではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

**浅井** 田舎は保守でしょう。保守というのはどのようなことなのかを理解するのは、実際に地域に住んでみないと分らないのですよ。保守の意味を理解することが大切です。地域には歴史もあるし、人の層もある。それをよそ者の言葉で動かしていこうとするのは大変なことでした。先程、村上さんが仰ったように酒を飲み交わすことなどで、地元の人と打ち解けあうことが大切なことなのだと感じました。

館山の観光プロデューサーに公募で採用されましたが、実は論文ではトップの人は女性で、私は次点だったのですよ。しかし、観光プロデューサーは力仕事の面もあるのでということで私になつたらしいのです。

**渡邊** 私は、力仕事もデスクワークも何でもしないとイケないのですよ。

**浅井** 飲コミュニケーションはいかがですか。

**渡邊** 夜の会議も多いですが、誘われれば顔を出すようにはしていますよ（笑）。

**中根** 外から来た観光プロデューサーとしての難しさは何処でもあるでしょうけれども、逆に東京で仕事し

ていた時には味わえないような良さ・収穫のようなものはありますでしょうか。個人的な感想でもかまいませんが。

**渡邊** 稲取に行く時に、どのような活性化のプロセスを採るかといったイメージはもっていました。しかし、どのような方がいらっしゃるのか、あるいはどんな風土の地域なのかは全く分らずに着任いたしました。それまで稲取とは何の縁もなかったもので、まっさらな状態で地域に入り、まずは人を知るところから始めました。

私の目指そうとしたものの一つは、既存の枠組みを崩すことにありましたので、既存の観光協会の予算を使わずに、個人的な活動としてボランティアを募集するという荒々しい方法を採用しました。自費でちらしを作って、役場の回覧の仕組みを使わせていただき独力で全戸配布をし、58名の方々に集まっていただきました。メンバーは20歳から70歳台までの方で、旅館のオーナーさん、居酒屋さん、クリーニング屋さん、大工さん等、職業も多岐にわたっています。そしてこのメンバーの間だけは、立場に縛られず何でも話し合える場としてやっていきましょう、ということだけを決めました。稲取という地域は、小さな地域であり、皆が下の名前呼びあうような地域なのですね。これは、先程申し上げました大変な面もありますが、一方では、親しみ、結束力、団結力等のパワーにもつながる良さもあるんです。

着任してまだ3ヶ月位でしたが、着地型旅行を売り出そうということで、第三種旅行業の組織を設立しようとする機運が高まり、観光協会とボランティア組織とが核となって地域の方々に声をかけたところ、たった10日間で50社以上から900万円の出資が集まった。今月末には登記となる予定です。今後はこの会社でどのように収益をあげていくかという新たな課題に直面することになると思います。

**村上** さすがスピードが速いですね。私の時代は4月に着任して半年間は何も事業をしていませんでしたからね。


**中根** 皆さんが厳しい状況の中で稲取の有志から900万円という金額はすごいですね。観光だけでなく、広くまちづくりに参画したいといった潜在的な力があつたのでしょうか。ボランティアグループも含めて新しい組織には、これまでの観光とは関係のなかった分野の方々が参画されているわけでしょう。国内の観光も、農業・漁業、商業、教育などの観光業でなかった資源や人材が鍵を握るようになってきていると思います。そういうテーマ・素材や人との出会いというのを浅井さんも感じておられるのではないのでしょうか。

**浅井** 3年間の活動では仕事の上では大きな成果は見込まれないだろうと見切って、ボランティアグループの組織化から入りました。着任して2ヶ月で始め、70~80人の参画を得ました。現在も館山と縁が切れないのは、活動を通してその時参加いただいた方々の生き方まで変えてしまうことになってしまった、そういうこともあつたためです。地域との連帯感を感じ、それがベースになっています。

**中根** 渡邊さんの「組織としての行動ではなく、まずは個人として動き、相手もこれまでは観光と無縁であつた方々がボランティア活動として行動する」という話にもあつたように、外から入ってこられた皆様

**こらっしえ稲取 大作戦!**  
勢のつるし取りのまちづくり開始

求む!



まちあそびプロジェクトと一緒に汗を流して下さる方を大募集します!

募集人員▲50名(先着順) ※稲取在住で男女、年齢を問いません  
募集期間▲5月23日(水)～31日(木)  
活動内容▲観光で魅力的な稲取を、まらぐらみて発信するためのプロジェクトです。  
自前10回のお祭りワークショップに参加していただきます。  
活動期間▲H19年6月～H20年2月

①たのしみ探訪プロジェクト  
名物スポット・お店・お祭り・食べ物・人物などの「たのしみ」を探ります。

②いよし観光プロジェクト  
温泉・山形屋・産・山・景色などの「いよしの美」を探ります。

③歴史ロマン探訪プロジェクト  
歴史・書・文庫・歴史・くらしなどの「歴史・文化」を探ります。

④「こらっしえ稲取」集団プロジェクト  
活動成果の発信のためにチラシを作り、PR大作戦を展開します。

お申込み：fax(05)5180 または下記にご郵送ください・お問い合わせ  
☆総機1521-3 稲取温泉観光協会 電話(95)1401 担当 事務局長 渡邊浩子  
「あまものさがし」かがいて発信 総合プロジェクト  
ボランティアメンバー 登録申込書 ※個人情報は厳正に管理します。

氏名	年齢	性別	性別	性別	性別
電話	( )	参加希望プロジェクト *2つお選びください			
		①	②	③	④
住所	栗伊豆町	メール	@		
携帯電話	( )	FAX	( )		

方の活動を支えていただいているのは、このような方々の支援が大きかったのです。まちづくりに対する意気込みや熱意がマッチングしたということなのでしょうね。

**村上** 着任して3年間地元の有線放送の番組でTVに出ました。「下田を斬る」という番組をもっていました。番組のタイトルからも分ると思いますが、番組では辛口のことをいうことが要請されました。市民からはエールを送っていただく反面、別の筋からは不評でしたが…。よそ者の目とは言え、市民の皆さんも感じていることを代弁しているにすぎない面もあるのですがね。地域の中にも何か変えないといけないという機運はあったように思います。

**渡邊** 地域では言いたくも言えない人がたくさん暮らしておられるのですよね。観光協会の事務局長は、地域の声を聞く役割でもあると思っています。

**中根** 渡邊さんは、時節柄と女性であるということから、登用された時からマスコミの注目を浴びていたから大変だったでしょう。

**渡邊** 2年限定であること、観光協会の予算を削って私の年棒に当てているということを考えるとイベント的な全国公募であったと思います。

ここに住みつけようと思うと、言わなければならないことも遠慮して言えないということにもなりかねない。2年で区切りをもって結果を出すと考えれば、荒々しい手法ではあってもスピードアップして取組まないといけないと思っています。本来的には、1~2年間の時間をかけてボランティアを養成してから、人と組織を作って事業を組み立てることが良いと思います。2年で結果を出すと決めたことが逆に、地域の中で鬱積していたパワーを結集させることにもつながったものと思っています。

**浅井** 2年間であれば、普通なら、季節を考慮するとトライアルできる機会は2回位しかないでしょう。

**渡邊** 4月に入って事業費の支援をいただける事業として、経済産業省と国土交通省、静岡県の実業に企画書を提出し、採択を得て支援いただいているような状況です。準備の期間がありませんでしたので。

### 【3】地域が動くために、今、何が必要か？

**中根** 地域それぞれの事情はあるでしょうが、地域が変わるためには何が課題となっているのでしょうか。

**浅井** 地域住民の方々を如何に巻き込むことができるかというところがポイントではないでしょうか。

**中根** 観光に直接的に関わってこられなかった一般市民の方々を含めてということですよね。

**浅井** そのためにはどのような旗を掲げるかではないですか。

**村上** 「観光立市」「観光立町」という旗印を掲げている割には、市民の方々は理解されていないことが多いことが問題なのでしょうね。市や町の予算を組む際にも、教育や福祉等を優先してつけて、残った予算が観光に回っているのではないかと思います。本来的には、観光を基軸とした産業を創っていくことが観光立市や観光立町であるべきなのです。このことを理解していないから、観光を中心とする町は苦勞しているのではないのでしょうか。地域の首長が、何故観光が必要なのかを地域住民に理解してもらえるように語る必要があると思います。

**中根** 観光プロデューサーとして自分の意思を受け継ぐ後継者の育成、あるいは組織づくりという点で、浅井さんが活動された3年間ではやはりNPOの設立に尽力されたことが大きかったのではないのでしょうか。

**浅井** 館山には、色々なタイプの方々がおられたので、人材の特性に合わせて、歴史文化系、自然体験系、

まちづくり系の3つのNPOを組織化することを構想しました。それぞれのNPOが国の表彰を受賞する等、お互いに競う形となり、それらのこともあり事業への取組みがスピードアップすることになりました。メンバーの年齢的にも、向こう10年は活動できる組織づくりを行うことを目指しました。またNPOを設立したお陰で、国や県からの事業を受けるなどの支援をいただくことに繋がりました。

**中根** マスコミが取り上げたり、国からの表彰を受けるということで、一皮剥けた活動へとレベルアップしているともみることができますね。

**浅井** TVや新聞に活動が報道されても、まちの人々にはなかなか気づいてもらえないところがあります。地域の保守的なものは堅いと思いますね。段々少なくはなりましたが、NPOというだけでアレルギーをおこす人達も未だいらっしゃるのではないのでしょうか？NPOの市民活動に対して正当の評価をしてもらうには時間がかかるなあと感じています。

一般市民との協働作業がもっと加速してもよいと思っているのですがね。ようやく駅前の商店街で動きをみせはじめています。それはエコミュージアムの考え方を地域に導入して、地域全体をみせるという形で動き始めています。しかし実績を着実に残しつついけないと加速は望めません。

**中根** 館山・下田・稲取も半島の突端ですよ。

浅井さんの発言にありました、地域をまるごと見せるということは、言い換えれば元々限られた平地に肩寄せて生活している半島の観光は、地域がまるごと見えてしまうとも言えますね。しかし逆にこれが半島らしい文化や生活観を伝える魅力が凝縮していると感じています。

**渡邊** 6つの温泉郷があるといっても稲取岬に多くの住民が住んでいる。ありのままを受け止めてどう見せていくかを考えるしかない。

**村上** 無理に変えていく必要はないと思いますね。

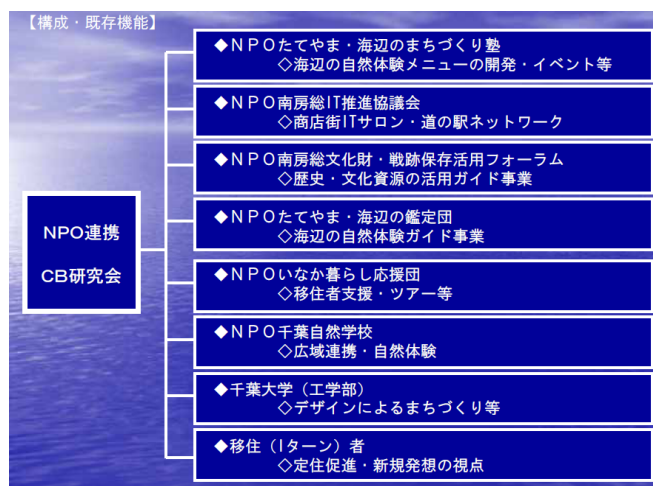
私は半農半漁に「半観」を加えてみれば良いと提唱しています。民宿に対しても「何故学生さんを受け容れるのか」を徹底的に話しあいました。教育旅行に対する勉強会を開催したところ、4つの集落が手を上げたのです。半島は半分は島なんだから不便なのは仕方のないこと。

**渡邊** 不便なことを逆に売るしかない。

**中根** 私の恩師である鈴木忠義先生<sup>※1</sup>からの教えなのですが、平場や街道筋の交通条件の良い所の観光は本で言えば『雑誌・週刊誌』、それに対して半島の観光は『純文学』だと言われました。雑誌・週刊誌は誰でも一定のレベルの同じ理解はできる。純文学は、一人ひとりが読み込んで自分の価値観と照らし合わせてイメージを膨らませるから深みが違うのだ、というのです。

**渡邊** 稲取にしかないものも結構あるんですよ。当然地域の方々は気づいてはいない。観光立町だということすら知らない方々もいる。活動のネーミングを「こらっしえ稲取大作戦！」としたのも、外部からの集客のためだけでなく、地域の方々にも知っていただきたいとの願いもあったのです。地域の資源も、お越しいただく人の志向によって異なることから、リピートして来訪いただける仕組みへと展開したいと思っています。これが着地型旅行のポイントであると思っています。

※1 東京工業大学名誉教授



【館山市のNPOと連携組織】

また一般の住民の方々も着地型旅行の事業に関わることによって、商品がより磨き上げられるのではないかと期待しています。地域の何でもが商品になるのではないかと考えています。

**村上** 稲取という地名は変換できない地名だったのですが、稲取の知名度が上がって理解いただけるようになった、その効果は大きいと思っています。

**渡邊** 駅名も伊豆稲取ですし。

**村上** 行政も稲取町ではなく、東伊豆町ですしね。

**中根** 市民を巻き込んで地域をまるごと見てもらうということと、2~3年で観光プロデューサーとして結果を出さないといけないという二つを考えると難しい点は多いですね。市民を巻き込もうとすることは、地域の風土や歴史とも関わってくるので、本来ならば10年間位かけてじっくりと取り組むべき課題ですね。それを2~3年で結果を出さないといけないと思うと、その間のジレンマがあるのではないのでしょうか。

**浅井** 最初は観光に近い方々を意識していましたが、なかなか浸透しないということは、地元の主要産業である農業・漁業・商業の分野への力の入れ方が弱かったかな、と今は感じていますね。地元の主要産業が動きをみせないと地元はなかなか認知してくれないんですよ。観光は結果的にまちづくりになるとは思っていましたが、取組みにあたっての働きかけは戦略的にやるべきであったと思っています。稲取も農業や漁業が産業のベースですよ。

**渡邊** その問題を積極的に考えようとする人を育てるということであれば対応はできるでしょうね。地域の中での調整役を買って出て、人材を見つけ出すということは可能であると思います。そういう人材がいれば意識の後継はできると思います。

#### 【4】市町村・県・国に望むこと

**中根** まちづくりと観光は一体のものとして捉えないといけないと思います。あくまで個人的なお考えで結構ですので、市町村や県、国に対する役割・要望はいかがでしょうか。

**浅井** 我々が実践しているニューツーリズムの分野の観光では、もっときめの細かな情報を発信しないと観光客に伝わらない。マスコミに対するアピール、観光キャラバン、HPによる情報発信といったこれまでのプロモーションは網を投じるような手法ですが、それだけでは交流観光を求める新しい層に対する情報がなかなか浸透しない。プロモートの仕方も変わっていかないとならないと思います。DCキャンペーンが終わった後、千葉県では今後3年間観光プロモーションを展開するために協議会を立ち上げました。幸いニューツーリズムに属する千葉自然学校が役員団体として認知されることになりましたので、プロモーションのあり方についても発言できるようになったと思います。

**村上** 行政の観光課と観光協会との人材面で差がある。伊豆では観光協会の方が観光のプロである。行政は人事異動で担当が替わるのでノウハウが継承されない。そのため観光協会に挨拶・伺いに行かないと何事も進められないようになってしまっている。そこで行政にアドバイザーのような人材が加わると観光行政も変わってくると思う。浅井さんの意見にあった観光協会のやり方については、観光協会としてはこれまでの方法を変えてまでは進めたくないという意識の表れであると思いますね。下田市では、私が6年間携わっている間に観光課長は5人替わりしましたから。

**浅井** 観光協会と我々が実践している事業との連携も十分にとれていない。

**渡邊** 観光協会として進めるには同意を得られないと難しい。行政は当てにならないので、自分たちが自立

して、自らが収益性を求めて取組むしかない。補助金は一定ではなく年々減額されることもある、また当然ながら一定の制約もある。慣例として変更できないイベントもある。着地型旅行は、実践しつつ、その中で収益をあげて自立して取組むスタンスしかないのではないかと思います。新しい事業に取り組むにあたっては、皆さんにタダ働きしていただいていることが多いので、少しでも人件費を支払えるようにしてゆきたい。

**村上** 東伊豆町は稲取温泉観光協会だけではないので、さらに仕組みとしては複雑で難しいでしょうね。

**渡邊** 稲取温泉観光協会としては行政は当てにせず、独自路線で行くしかないのですよ。そのため、会社を組織化して自立の道を一刻も早く拓く必要があるのです。

**中根** 厳しい見方ですが、これまでの伊豆半島の観光行政は計画行政に乏しかったと感じています。右肩上がりの時代では、行政はポスターを作ったり、キャラバンを張ったりのプロモーションを実施していれば、実際の集客は民間事業者が引っ張ってくれたという図式があった。

収益性を担保しようとする短期的にも結果を出さないといけないですが、一方で中長期的に 10 年間スパンで観光を健全な産業として育てるシナリオを、誰かがみていないといけないのです。短期的には成果は得られなくても、次の世代のためにも取組む必要があるということ、きちんと誰かが明言して実行することが大切です。

**村上** 行政は単年度決算です。足りなければ行政から、あるいは行政から出ないのならその範囲でやりましょう、では継続的にレベルアップする地域にはならない。

**浅井** 行政も進化したと感ずるのは、観光と観光地づくりの違いに気づき始めたこと。観光とは何かの原点に戻って観光地づくりを行おうとするようになったことは評価できると思う。

**村上** 観光を掌握する課の名前も変わってきた。館山の取組みは早いのではないのでしょうか。

**浅井** 行政としては前例があると取っ付きやすい。全国的にもっと多くのモデルが出てくることを期待していますね。我々の地域は半島ですから、全国的なモデルとはちょっと異なる。全国的には観光資源とは何かを再度考え始められている。観光資源の見直しから観光地づくりを目指していく際に、観光プロデューサーの役割があるように思う。観光資源の見直しだけなら、地域だけでできるものであると思う。

**中根** 価値観の変革に最も腰が重かったのは役所だったのかも知れませんが、その役所の内部が変わってくると今後の期待・展望が広がる。そのように持っていくには、観光協会や観光プロデューサーの力だけではなく、むしろ市民や NPO 等の組織が、観光プロデューサーをバックアップして声をあげることが大切なのですね。

**浅井** 私や村上さんが始めた頃には、そのような動きはまったくなかった。

**中根** だから先駆者のお二人は随分とご苦労されたと思います。以前から旅行会社から観光協会への出向はありましたが、現在のような役割を担った観光プロデューサーの公募としては、私の存じている限りでは 1998 年に湯布院と松江市で実施したのが始まりではないのでしょうか。そしてその仕組みを館山に持ち込んだと聞いていました。館山市が観光プロデューサーの人件費と活動費をきちんと担保して取組んだことは先駆的であったと思います。

**浅井** ニューツーリズムという言葉もなかったですよ。

**村上** 2001 年頃から、観光・旅行業のみならず、様々な分野で民間を登用するという風潮が全国的に展開されてきたように思います。

**浅井** 中根さんの紹介で、村上さんを紹介いただいたことは、地域にとってプラスになっている。そして本

日はまた、渡邊さんをご紹介いただきましたが、このような観光プロデューサーの輪が広がることを期待しています。地域は異なりますが、同じような仕事に携わっているのだから直ぐに分かり合える、お互いの悩みを相談しあえるように思えます。

**村上** 愚痴をこぼせることが良い。地元では絶対に言えないからね。伊豆での活動では、新聞社と巧く連携されることが効果的であると思います。観光に協力的ですから。

**渡邊** 今回の組織化の話題も新聞社に情報提供していますので、書いていただければと思います。

**中根** 浅井さんと村上さんは前例がない中で先駆的に力仕事で地域を開拓してこられたと思います。今回の稲取の公募では、外部から女性が切り込んでいったこと、女性の役割も高まってきていることが適時性を得たものと思っています。観光はもてなしの産業ですので、ますます女性の力が期待されてくるものと思いますね。

**浅井** 最近女性のプロデューサーの方とお会いすることが多いのですが、女性はシャープであることに加えて、これからの観光は生活・環境が売りになるので女性のセンスが必要だと感じています。この分野は女性が進出する領域であると思いますね。

**渡邊** 仕事で福岡に行った際に仕事が終わって居酒屋さんに入ったら殆どが男性客。東京では女性客も多くなってきていますが、まだ地方ではそのような状況であったことにびっくりしました。女性は、忍耐強いので調整役に向いていると思います。観光プロデューサーまでは無理でも、コーディネーターの役割を外から入って実践することはできると思う。中間支援組織の人材を育てることは一番大切な仕事。その重要性に行政は認知していただきたいと思います。

**村上** 観光客の半分は女性なのですがね。

**浅井** 先日、旅のもてなしプロデューサー養成講座に出席いたしました。受講された方の2割が女性でした。生涯学習をテーマとすると女性の方が多いですね。

.....

**中根** 議論がまだまだ続きそうですが、お時間となりましたので、本日はこのあたりで座談会を閉じさせていただきます。観光プロデューサーの輪を広げようというご意見もいただきました。ネットワークというか“縁”を広げるという意味から、またこのような場を開催いたしたいと思っています。

また、観光プロデューサーという領域での活動についても、教本には書かれていないような皆さんの苦勞ややりがいを、様々な方々に知っていただけるようにアピールしていきたいと思っています。本日はお忙しい中、貴重なご意見を賜りありがとうございました。



平成 19 年 9 月 22 日(土) 11:00~12:50

## <懇談を終えて>

今回初めての試みであった『地域観光プロデューサーの先達に聞く』は、お世話になっていた観光プロデューサーの方々と、当初は“気軽に一杯やりましょう”程度の思いであった。しかし観光立国推進基本法が施行され同基本計画が閣議決定されるという時代変化の中で、観光を通じた地域の活性化にとって「観光プロデューサー」に対する期待と役割が大きく注目され始めている。厳しい財政状況にも関わらず予算を捻出し観光プロデューサーを招聘しようとする地域の思いや、ライフワークとして地域に飛び込み、地域と一緒に役立ちたいと考える方々に、少しでも先駆者達の苦労談ややりがいを伝えられたらと考え、多忙な御三方に懇談と公表をお許し頂いたしだいである。

地縁血縁もない地域に一人切り込んでゆく意気込みと覚悟への報いは、金銭だけで計れる問題ではない。浅井氏は言われた『観光協会長とお会いする機会があり、「浅井さんが取組んでくれたことが地域の新しい観光の始まりだった」と言っていたいただきました』と。

また三人が共通して言われたことが人材の発掘である。村上氏は言われた『着任当初は、地域の方々と会うことに時間をとりました』と。また浅井氏は3年間の間で5つのNPO法人の立ち上げに尽力され、現在はNPO同士の連携により館山市の横断的な活動が継承されている。さらに渡邊氏は言われた『・・・人材を見つけ出すということは可能であると思います。そういう人材がいれば意識の後継はできると思います・・・』と。

数年間の任期の中で、たった一人の観光プロデューサーが、地域の観光のすべてを改革し、数字で結果を出すことなど容易ではない。限られた時間の中で観光プロデューサーに対する最大の期待は、地域を良くしたい、変えたいという“人材”と“思い”を地域で発掘し、役者として舞台に引きあげ、プロデューサーが去った後も“意識の後継”がなされる道筋をつけることと言えらるだろう。

外から地域に入られた観光プロデューサーを、“無医村に派遣された医師”に喩えらたら失礼だろうか？ 彼らはいわば地域観光の“掛かり付け医”である。掛かり付け医は例え専門分野が外科であろうと内科医であろうと、地域のいかなる病症から逃げるわけにはいかない。一方われわれ東京に拠点を置く調査機関やコンサルタントは専門医である。専門医は地域で孤軍奮闘される彼ら掛かり付け医と連携し、サポートできる関係を築くことが使命であると痛感させられた。

2007年9月

(株)ツーリズム・マーケティング研究所

中根 裕

### 懇談会メンバー ご紹介

- |         |   |
|---------|---|
| 浅井 信 氏  | 大手旅行会社 近畿日本ツーリストに勤務し、主に海外旅行分野を歴任。<br>平成 13 年 千葉県館山市が公募した観光プロデューサーに在職中応募し就任。<br>平成 16 年から館山市観光アドバイザーとなり、同時に NPO 法人千葉自然学校の理事に就任し現在に至る。                |
| 村上 政司 氏 | 昭和 42 年(株)日本交通公社（現ジェイティービー）に入社後、神奈川県一帯の支店で国内旅行分野を中心に勤務。<br>平成 12 年より静岡県下田市観光協会営業部長として出向<br>平成 14 年より同市役所観光アドバイザー<br>平成 18 年より(財)箱根町観光協会専務理事就任       |
| 渡邊 法子 氏 | 昭和 58 年に大学卒業後銀行に勤務し、61 年に退職。<br>平成 15 年に NPO 法人全国まちづくりサポートセンター事務局長就任（16 年より理事兼務）、京都府京丹後市などの地域活性化事業に取り組む<br>平成 19 年より静岡県稲取温泉観光協会の事務局長の公募に応募し就任、現在に至る |

#### 【司会進行】

- |      |  |
|------|--|
| 中根 裕 | 昭和 51 年に(財)日本交通公社入社後、観光を通じた地域調査、コンサルティング業務に取り組む。<br>平成 13 年より設立された(株)ツーリズム・マーケティング研究所に出向の後、平成 18 年に移籍。 |
|------|--|

【記録】 大下・河野



(写真左より…村上氏、浅井氏、渡邊氏、聞き手・中根)